ふれあい

NO. １８１
２００８. ７. １５.

社会福祉法人　大阪市知的障害者育成会
(別名 大阪市手をつなぐ親の会)
大阪市天王寺区東高津町 12-10
大阪市立社会福祉センターＢ１Ｆ
発行責任者　笹野井　庸夫
TEL　06（6765）5621　FAX 06（6765）5623

「ＣＡＭＰでＣＡＰが教えてくれたこと」

当会理事、ＮＰＯ法人キャンピズ代表理事
石田　易司

古くから「かわいい子には旅をさせろ」といわれている。これは親子で楽しむ家族旅行などのことをいうのではなく、一人旅、もしくは子どもの仲間同士の旅をいうのが当然だろう。つまり、親離れ、自立への旅、まさに旅立ちなのである。しかし、障害の子を持つ親は一般的にかわいさ余って、「うちの子に一人旅なんてとんでもない」と思っている。

私たちは障害児者のキャンプなどの野外活動を支援するＮＰＯを作って、活動している。一〇〇人を超す障害児者メンバーがいて、夏はもちろん、年間を通して野外での活動を楽しんでいる。昨年はハワイやモンゴルでもキャンプを実施した。

支援するボランティアも二〇〇人ほどもいて、十分な支援体制で安全に様々な冒険プログラムにチャレンジしている。

知的障害者のキャンプは、当育成会がアサヒキャンプと協力して、一九五八年生駒山上で始めたのが日本で最初だといわれている。そんな五十年以上の伝統のある知的障害児者のキャンプなのである。

あるボランティアがそんなキャンプの一枚の写真を見て、とても面白いことに気づいた。二〇人もいた参加者のうち、十七人がＣＡＰ（野球帽）をかぶっている。二十歳前後の若者の集まりでＣＡＰをかぶっているのは、一般的には五人もいないのだが、こんなたくさんのＣＡＰであふれているのはどうして？と調査をしたら、九〇％を超えて障害児の服をお母さんが決めているという結果が出てきた。異常な数のＣＡＰはお母さんの趣味の押し付けだったのだ。服だけでなく、就労も結婚も障害児の人生の中の大切なことは何でも母親が決めているのだ。

「だって、うちの子どもはできないんだもの」というお母さんの声が聞こえてきそうだが、お母さんの思うより子どもたちはずっとできるのである。

こんなエピソードもあった。ある地域でグループホームを作ろうとして、子どもに意見を聞いたら、「僕はいつもキャンプに行っているから、お父さんやお母さんがいなくても自分のことは自分でできる」と自立の意向を示したらしい。ずっと一生そばに置いておくはずだったのに、子どもの方が先に親離れしてしまったと、お母さんはうれしそうに語っておられた。お母さんは「お母さんと離れるのが嫌だ」という子どもの返事を期待してかけた質問だったのに。

こんな話もある。毎年する高齢者のキャンプに、六十歳近いダウン症の子どもさんと一緒に参加されていた八十歳過ぎのお母さんがおられた。お母さんはいつも元気でキャンプを楽しんでおられたが、あ